

石川県立美術館だより

平成 19 年 5 月 1 日発行 第 283 号



馬に凭る(A)

生誕 100 年 — モダンの煌めき
高光一也の画業
4 月 22 日(日) ~ 5 月 20 日(日) 会期中無休
毎週土曜日は夜 8 時まで開館

特別公開

重要文化財「百工比照」

特集

美の至宝 芸術院会員名品展
高光一也とエコール・ド・金沢
古九谷・再興九谷展

4 月 22 日(日) ~ 5 月 20 日(日) 会期中無休

目次

高光一也の画業—モダンの煌めき	2	アンケート結果	5
重要文化財「百工比照」	3	ミュージアムレポート	6
古九谷・再興九谷展	3	バスツアー募集	7
高光一也とエコール・ド・金沢	4	5月の行事案内	7
美の至宝—芸術院会員名品展	4	所蔵品紹介	8
コレクション展示室主な展示作品	5	ミュージアムショップ通信	8

企画展示室 (7~9 展示室)

生誕100年 — モダンの煌めき

高光一也の画業

主催 / 石川県立美術館

4月22日(日)~5月20日(日)会期中無休



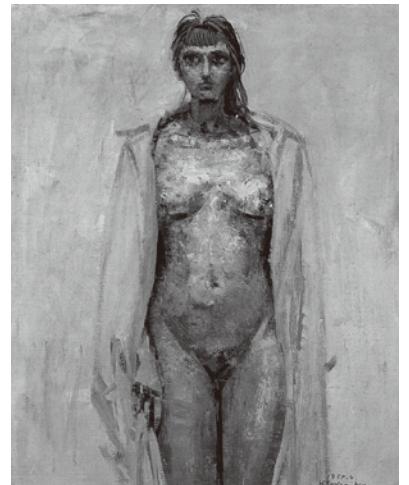
立秋 東京国立近代美術館

本年生誕百年を迎える高光一也氏の画業は大正末から昭和末まで六十年に及びます。この時代に写真で人物を描く画家は時代の波に翻弄され続けたのでした。戦時中は従軍画家として徴用されて花形となり、戦後はその反動で非難を受け、さらに抽象絵画全盛期にあつては、自己のスタイルとの折り合いに模索の時期を過ごします。常に制作は外的要因とのせめぎ合いの中でなされてきた感があるのです。美しいものがあるがままに描くことを決意したとき、画家たちはすでに晩年にさしかかっていました。でも、その成果の豊穡さは、日本洋画史上に高く評価されるべきものといえましょう。

昭和の始め、洒落た都市生活の匂いを画面に漂わせた作品が描かれた頃、高光氏は剛毅な作風で著名な新婦朝者中村研一に学び、官展に登場します。農婦たちが大画面に憩うという、都市生活とは対照的な作品で評価を得るのですが、その表情にはやはりどこか憂鬱げで瀟洒な時代の雰囲気を感じられます。

戦後にはいち早く渡欧してパリ画壇を肌で感じ、また後のスタイルに大きな滋養となるアフリカ彫刻とも出会います。帰国後の抽象画全盛の頃は、幾何形体に細部を省略した人物に挑み、穏健とされる日展、光風会にあっては異色の存在であり続けたのでした。

本展は高光氏の画業を「時代に挑み続けた画家」としての視点から構成いたします。時代への対応を、師中村研一の戦前期の作品、同世代



白いマントの裸婦

の小磯良平、宮本三郎の作品をご覧ください、その差異と共通点により、より明確にしたいと考えます。

また、高光氏は終戦後間もなく誕生した金沢美術工芸専門学校(現金沢美術工芸大学)の創設にかかわり、短期大学時代は小糸源太郎を教授に招いて共に後進の指導にあたった教育者でもあります。故、鴨居玲、現芸術院会員の塗師祥一郎氏と村田省蔵氏、美大名誉教授の円地信二氏など数多くの具象画家が学んでおり、その影響は大きいものがあるといえます。こうした指導者としての高光氏を教授時代の小糸源太郎の作品と共に紹介したいと思います。

幅広い高光氏の画業のあゆみを、この機会にぜひご覧いただきたく思います。

【主な作品】

- 画室のテリヤ 昭和6年
- 秋Ⅰ 昭和11年 石川県立工業高等学校蔵
- 秋Ⅱ 昭和13年 南惣美術館蔵
- 暁の遙拝 昭和16年 当館蔵
- 勤労出勤 昭和19年 当館蔵
- 画室にて 昭和21年 当館蔵

- 南を想う 昭和22年 浅野川小学校蔵
- 立秋 昭和24年 東京国立近代美術館蔵
- 裸婦 昭和27年 当館蔵
- 白いマントの裸婦 昭和30年 当館蔵
- 母子 昭和34年 当館蔵
- 浜の女 昭和36年 金沢都ホテル蔵
- 収穫 昭和38年 実践倫理宏正会蔵
- 緑の服 昭和45年 日本芸術院蔵
- フードの女Ⅰ 昭和47年 当館蔵
- 遺跡に唄う 昭和49年 能登ゴルフ倶楽部蔵
- ボンペイの旅Ⅰ 昭和50年 東京都現代美術館蔵
- 菩提樹の下で 昭和51年 北陸放送蔵
- ビザンチン回想 昭和52年 金沢美術工芸大学蔵
- バストルの家 昭和53年 金沢市文化ホール蔵
- 馬に凭る(A) 昭和57年



菩提樹の下で 北陸放送

◆講演会 (入場無料)

日時 四月二十二日(日)午後一時三十分
テーマ 「師 高光一也の思い出」
講師 藤森兼明氏(洋画家)

会場 当館ホール

◆観覧料

個人	一般	1,000円	団体(20名以上)
	大学生	600円	
高中小生	一般	300円	大学生
	一般	800円	
高中小生	一般	500円	高中小生
	一般	200円	

※当館友の会員は受付での会員証提示により、団体料金になります。



重要文化財「百工比照」 金具類

今月のコレクション展示室
(前田育徳会・尊經閣文庫展示室)

特別公開

重要文化財 百工比照

4月22日(日)~5月20日(日)会期中無休

重要文化財「百工比照」を十四年ぶりに大公開します。

加賀藩五代藩主前田綱紀は、祖父の三代藩主利常と並び、深く文化事業に意を注いだ藩主です。殊に学術的・資料的価値のある図書収集に目を向け、網紀が記した『桑華字苑』にみられるように、記録魔・整理魔であったことがわかります。

「百工比照」は、網紀が藩内の文化や産業の振興のために、収集・整理・分類した工芸全般にわたる資料の集大成で、網紀自らが名付けています。「百工」とは、諸種の工芸、あるいは工匠の意味であり、「比照」とは比較、対照するという意味です。

その内容は工芸の各分野にわたり、紙類、張付唐紙類、表紙類、外題紙類、金色類、木之類、蒔絵梨子地塗色類、色漆類、草類、織物類、小紋類、打糸類、竹類、羽織類、旗指物類、甲冑籠手佩楯類、馬具類、作紋類、巻物軸象牙籤等、染色類、金具類(屏風長持金具・彫金押金・引手・釘隠・取手)などが十一箱に分類整理され、総点数は二百点以上になります。

これらは各地の産物を購入したものや、注文して作らせたもの、また建物に実際に用いられていた金具類などの実物資料と、実物ではなく図示したものや雛形など今日のデザイン見本帳に相当するものとの二種類に分けられます。

こうした江戸時代前期から中期にかけての工芸技術が今日に伝えられる資料として極めて貴重なものであり、石川県の工芸のルーツともいえるべき「百工比照」を、ぜひこの機会にご鑑賞下さい。

◆講演会 (入場無料)

日時 五月六日(日)午後一時三十分
テーマ 「百工比照について」

講師 嶋崎 丞(石川県立美術館長)
会場 石川県立美術館ホール

古九谷と再興九谷諸窯の名品を中心とする恒例の展示です。

古九谷は加賀藩の支藩である大聖寺藩で、江戸時代前期の明暦年間(一六五五~一六八八)頃から、享保年間(一七一六~一七三六)頃にかけて操業されました。大胆な構図と雄大な筆致、絵の具を盛り上げた重厚で豪放な趣をみせる作品が多く、わが国の色絵磁器を代表するものの一つです。

古九谷は約半世紀程で廃窯となりましたが、江戸時代後期になって藩内各地で復興された九谷焼を再興九谷と称します。最初、金沢の春日山で興り、以降、能美郡及び小松市、加賀を中心に諸窯が興り、それぞれに多様な特色を示し活動しましたが、若杉窯以外長続きした窯は少なく、興亡を繰り返しました。

本展では館蔵品・寄託品のうち、古九谷・再興九谷諸窯の代表的な作品や特徴的なパターンの作品をご覧いただくとともに、近年の九谷焼研究の成果を踏まえ、各窯において名前が伝わる名工にスポットをあて、代表的名工の特色が出ているといわれる作品も併せ、ご覧いただくものです。

さて古九谷・再興九谷窯の作品の特徴は、古九谷が代表するように、多彩で独特のデザインを誇る絵付の魅力であり、その伝統は再興九谷各窯に引き継がれたものといえます。中でも吉田屋窯のように、上絵付の一品物焼成を中心とした窯においては、絵付を行った画工の腕や感性が作品の優劣に大きく作用したことは言うまでもありません。再興九谷各窯で活躍した名工を挙げると、若杉窯で伊万里風の彩り豊かな絵付を展開した赤絵勇次郎。吉田屋窯で、達者な絵付を誇った鍋屋丈助。若杉に始まり松山・連代寺窯などにおいて非凡な造形感覚と文様描写に腕を誇った粟生屋源右衛門。宮本屋窯において赤絵細描で活躍した飯田屋八郎衛門。幅広い技術を発揮した永楽和全。さらに幕末から明治にかけて、繊細で多彩な作風を確立した九谷庄三などの作品をご覧下さい。

(第2展示室)

特集

古九谷・再興九谷展

4月22日(日)~5月20日(日)会期中無休



□色絵鳳凰図平鉢

今月のコレクション展示室
(第3展示室)

高光一也と
エコール・ド・金沢

4月22日(日)~5月20日(日)会期中無休

企画展 生誕百年「高光一也の画業―モダンの煌めき」に関連し、高光一也氏の教育者としての活動に焦点をあて、金沢美術工芸大学在籍時に学ばれた画家と学外にあって師事された画家の方々の作品を特集展示します。

高光氏は戦後間もない昭和二十一年に誕生した金沢美術工芸専門学校(現金沢美術工芸大学)の創設にかかわり、四十四年までの二十五年間後進の指導にあたられました。その間には二十五年の短大昇格期から二十九年まで、小糸源太郎を主任教授に迎えて、本県の風景画に大きな影響を与えることとなります。自身は人物画家として、アンフォルメル旋風が日本に吹き荒れ、芸術家達の多くが抽象表現を試みた時、大胆な画風を展開し、比類ない牽引者として活動を続けられました。三十年代、抽象画全盛期の頃にみせた実験的ともいえる作風は、画学生を驚嘆させたでしょうし、またそれは、高光氏自身が若い学生のセンスを取り入れた成果でもあったのではないかと思われまます。

金沢美大油絵科卒業生達の作品、そして本県の画家の方々の作品には、渋く重厚な色彩と十二分に配慮されたマチエール(絵肌)が見受けられます。それは、金沢の風土と藩政期以来綿々と続く工芸どころゆえの、手業に対する敬意の結晶とみなすことができるとは、表現として磨き上げる、そうした作品が多いと感ずるのです。これを二十世紀前半パリに集った各国の美術家たちの作品傾向を総称する「エコール・ド・パリ」にちなみ、本特集では「エコール・ド・金沢(金沢派)」と呼称いたしました。その精華を第3展示室において一堂に会します。ぜひご覧下さい。

アドレシオン・デミトリオス

藤森兼明



ミラノドウォム 小田根五郎



【出品作家】

- | | | | |
|--------|-------|------|------|
| 相川昭二 | 井田重男 | 池田良則 | 円地信二 |
| オクヤナオミ | 小田根五郎 | 金岩清隆 | 鴨居 玲 |
| 川村 嘉久 | 北濱 淳 | 鈴木 博 | 高光 寂 |
| 竹沢 基 | 太佐寿一郎 | 田賀亮三 | 滝川 巖 |
| 棚瀬修次 | 谷 昭二 | 寺井重三 | 富田裕夫 |
| 林 可耕 | 林 清納 | 判 三教 | 藤井 肇 |
| 藤森兼明 | 前田さなみ | 増田 孝 | 松本 昇 |
| 高光一也 | | | |

日本芸術院は明治四十年に文部省美術展覧会(文展)を開催するために設けられた美術審査委員会を母体にし、大正八年文展が帝国美術院美術展覧会(帝展)に改められた際に、その運営主体となる「帝国美術院」として創設されました。その後昭和十二年に文芸音楽、演劇、舞踊の分野を加えて「帝国芸術院」に拡充され、戦後二十二年に名称を「日本芸術院」と変更し、今日に至っています。

また、芸術院会員の会議や親睦、日本芸術院授賞式などに用いられ、芸術院賞受賞作を中心に数多くの名品を収蔵、公開する日本芸術院会館は、上野公園内にあり、建築家吉田五十八の設計によって、平安の雰囲気現代的にアレンジして、昭和三十三年に竣工しています。

現在芸術院会員は百十名を数え、その内美術部門は五十二名、石川県出身の現会員は昨年洋画で村田省藏氏が新たに推挙されたことで、塗師祥一郎氏(洋画)、大樋長左衛門氏(工芸)、蓮田修吾郎氏(工芸)、三谷吾一氏(工芸)の五名を数えます。人口に比しての会員数は全国有数のものといえます。これは加賀藩以来の美術工芸奨励の伝統によるものと思われまます。また塗師、村田の両氏は金沢美術工芸大学油絵科の初期卒業生であり、豊かな実を金沢美大が結びつつあることを想起させるものでもあります。

本展は本県在住洋画家で初の芸術院会員となり、金沢美大で村田、塗師両氏を指導した高光一也氏の生誕百年を機に、日本芸術院の協力を得て、同院所蔵の作品と当館の芸術院会員の作品とを交え、日本画、洋画、彫刻、工芸の四分野にわたり、美の至宝ともいべき名品の数々をご堪能いただくものです。

【展示作家】

- | | |
|-----|---|
| 日本画 | 片岡球子、郷倉和子、佐藤太清、高山辰雄、中路融人、西山英雄、安田靉彦、山口華楊 |
| 洋画 | 鬼頭鍋三郎、絹谷幸二、小糸源太郎、芝田米三、島田章三、高光一也、田村幸之介、中山忠彦、中村研一、塗師祥一郎、藤本東一良、宮本三郎、村田省藏、山本貞 |
| 彫塑 | 兩宮敬子、木下繁、富永直樹、中村晋也、書間 弘、松田尚之、吉田三郎 |
| 工芸 | 浅蔵五十吉、十代大樋長左衛門、三谷吾一、蓮田修吾郎 |

(第4展示室)

美の至宝
芸術院会員名品展

—日本芸術院所蔵作品を中心に—
4月22日(日)~5月20日(日)会期中無休

面構(歌川派の三羽鳥) 広重
国芳(国貞) 片岡球子



今月のコレクション展示室

主な展示作品

4月22日(日)～5月20日(日)

●= 国宝、◎= 重要文化財、□= 石川県指定文化財



窓辺の静物 戸田博子



若日の影 矩 幸成

一般 350円	個人
大学生 280円	
高校生以下 無料	
一般 280円	団体 (20名以上)
大学生 220円	
高校生以下 無料	

◆観覧料

- 孤影 石田 矩
- 彫塑 奥田 鴨居
- 教会 憲三 玲
- 若日の影 幸成 康夫
- 窓辺の静物 戸田 博子
- 日本画 仁志 出龍司

- 前田育徳会・尊経閣文庫展示室
- 特別公開 重要文化財「百工比照」
- 色漆類
- 金具類(引手・釘隠・取手)他
- 第1展示室
- ◎色絵雄雌香炉
- ◎色絵雌雄香炉
- 第2展示室
- 古九谷・再興九谷展
- 色絵鳳凰図平鉢
- 染付花鳥図芙蓉手平鉢
- 色絵万年青図平鉢
- 色絵山水図卓
- 古九谷
- 若杉窯
- 吉田屋窯
- 粟生屋源右衛門
- 第3展示室
- 高光一也とエコール・ド・金沢
- ※本文を参照して下さい。
- 第4展示室
- 美の至宝―芸術院会員名品展
- ※本文を参照して下さい。
- 第5展示室
- 葆光彩磁チューリップ文花瓶
- 山法師蒔絵金胎盤
- 板谷 波山
- 寺井 直次
- 第6展示室

数字からみる展覧会

アンケート結果のご報告

昨年度「浮世絵展」「松田権六展」「石川義展」の3つの展覧会でアンケートをお願いしました。コレクション展示をご覧になった方からもいろいろなご意見をいただきました。その内容をお知らせします。

企画展への来場者は、どの展覧会でも県内の方が70～80%であるのに対し、コレクション展のみでは、県外からの来場者が60%を超えていました。従来からコレクション展は、県外の観光客が多いとの印象でしたが、数字の上でも裏付けられた格好です。

年齢別では、20代から70代まで満遍なくみられるものの、50代の女性が最も多い来場者でした。従来どの展覧会でもこの年齢層の方が多くことから、石川県立美術館を支えている年代とみることができそうです。

交通機関では、自家用車を利用された方が最も多く、石川義展では55%になりました。冬場の展覧会でもあり、高めの数字が出ています。この数字が公共の交通機関利用

者より少なくなると、混雑は少し緩和されるのではないかと思います。できるだけ公共の交通機関を利用してくださいよう、改めてお願いしたいところです。

ご覧になった感想では、「作者の人間としての温かみが伝わってきた」「落ち着きがあり、鑑賞するのにとてもいい環境だった」「実物を見るとその迫りに驚いた」など感嘆の声が相次ぎました。その反面、「外国の作品も展示してほしい」「展覧会の宣伝をもっとすべき」との注文も寄せられました。金沢市内だけでなく、県内各所にポスター・チラシを配付してはいるのですが、美術館の情報を知りたい人のもとに十分行き渡っていないのが現状のようで、今後よりきめ細かくすすめていきたいと思っています。

今回いただいたご意見をはじめ、これまでの展覧会に寄せられた皆様からの声を、美術館の活動に役立たせていただきたいと思います。これからもよろしくお願ひします。

ミュージアムレポート

学校出前講座 in 野々市小学校&金沢錦丘中学校

17年度のどこでもミュージアムに続き、18年度は「学校出前講座」と題し、県立美術館の所蔵作品を児童・生徒の皆さんに、学校の授業を通して当館の作品を鑑賞する事業を行いました。

第1回目は1月26日に野々市小学校小体育館にて小学5・6年生を対象に、学校側からの希望にあわせた14点の作品を「出前」し、作品鑑賞を行いました。

鑑賞の手がかりにワークシートを準備し、また、絵には何がかかっているかな？描かれているものからどんな感じがするかな、などと話を交えながら鑑賞を行いました。どの児童も真剣な瞳がとても印象的で、作品から受けた素直な気持ちをたくさん話してもらえました。



第2回目は3月14日に金沢錦丘中学校グロリーホールにて、2年生と作品鑑賞を行いました。金沢錦丘高校の前身、金沢二中の出



身である石川義氏や堀忠義氏の作品を含む14点の作品に、短い時間内ではありましたが、たくさんの感想をいただきました。また、放課後には昨年マイミュージアムの授業を行った3年生が作品鑑賞に訪れ、作品への思いなどを話してもらえました。

2回の出前講座で鑑賞された児童・生徒・教師の皆さんからたくさんの感動の言葉をいただきました。ありがとうございます。次の機会には是非美術館で作品鑑賞を楽しんでいただきたいと思います。

お知らせ

19年度のキッズ☆プログラムが はじまります！

今年度も小学生対象のプログラム、キッズ☆プログラムがはじまります。今年度は9月より改修工事のため休館しますので、プログラムのほうも8月までとなっております。

鑑賞講座は、コレクション展示室でテーマに沿って学芸員と一緒に作品鑑賞する講座です。19年度は3回、5月19日(土)は絵画、6月16日(土)は工芸、7月14日(土)は古美術を、13時30分より1時間程度で行います。参加は無料です。付き添いの保護者の方も一緒に作品鑑賞を楽しんでいただけます。

夏休み期間中に行う体験講座は展覧会にあわせて、作品鑑賞と制作体験をあわせて行うもので、材料費が必要となります。7月31日・8月2・4日に各学年に分けて行います。毎年たくさんのご応募をいただいておりますが、今年



度の詳細については改めて美術館だよりにてお知らせいたします。

この機会に私々と皆さんの美術に親しみましょう。

ご案内

昨年よりご案内してきた通り、9月から改修工事に入ります。来館された方はお気づきのよう、建物はしっかりしており、何のための改修工事かと不審に思われるかもしれませんが、主に電気や空調設備などを更新するものです。改修工事に伴い、9月からは1年間ほどお休みをちょうだいすることになりますが、できるだけ展示や行事を続けていきたいと思っています。

展示では、お隣の石川県立歴史博物館で9月に「日本の美」、11月に「加賀藩の美術工芸と芸術院会員・人間国宝」という二つの企画展を予定しています。また古九谷などは一部の期間をのぞいて、歴史博物館で常設展示することになります。

美術講座や映像ギャラリーは、石川県立生涯学習センター(もとの石川県庁の中央公園側庁舎)を会場に継続していく予定です。内容は夏ころの美術館だよりや行事案内で、ご紹介します。引き続き、ご参加下さいますようご案内いたします。

第4回 美術館バスツアー参加者募集

～口能登の古刹を巡る～

期日:6月10日(日) 参加費:5,000円(会員外5,200円) 募集定員:45名(対象は原則として成人)

【見学予定地】

◇永光寺

正和元年(1312)に開創された、曹洞宗発展史上最も重要な地位を占める古刹。二度の兵火で焼かれ、現在の建造物は寛永以後の再興ですが、各堂を回廊で結ぶ、曹洞宗伽藍の様式が守られています。今回は特別に、曹洞宗高祖の木像と位牌を納めた伝燈院を拝観することができます。

◇豊財院

大本山総持寺の開祖・螢山禪師が開いた曹洞宗の寺院で、能登初の禅修行の場が起り。重要文化財の馬頭観音菩薩等3体の仏像や、豊財院中興の祖とされる月潤和尚による、血書大般若経がよく知られています。

◇妙成寺

加賀藩前田家から手厚い加護を受けた、北陸における日蓮宗の本山。10棟もの重要文化財の建造物は、桃山時代の華麗な建築美を今に伝えます。今回は特別に、加賀藩三代藩主利常が、藩祖利家と生母のために建立した、指定物件の一つである書院に入らせていただきます。

◇正覚院

もとは気多大社神宮寺の別当寺であった、真言宗の寺院。気多大社講堂の本尊であった重要文化財の阿弥陀如来坐像や、若き日の長谷川等伯が描いた「十二天像」などを所蔵しています。今回はこの「十二天像」を特別に拝観させていただきます。

◇羽咋市歴史民俗資料館

1階では人々の暮らしの様子を、2階では遺跡や史実を示す資料を展示し、地域に根ざした視点から、羽咋市の歴史をわかりやすく説明します。

【申し込み方法】

◇往復ハガキに下記の事項をご記入し、ご応募下さい。返信ハガキにて参加証を発行します。応募者多数の場合は抽選となります。

①往信ハガキ裏面に「美術館バスツアー希望」と明記し、住所・氏名・年齢・会員番号をお書き下さい。

②返信ハガキの表面には、確実にお手元に届くように返信先(住所・氏名)をはっきりとお書き下さい。

③返信ハガキの裏面には、何も書かないで下さい。

◇応募先 〒920-0963 金沢市出羽町2-1
石川県立美術館 美術館バスツアー係

◇応募締切 平成19年5月22日(火)必着

※応募者1名につき、往復はがき1通でご応募下さい。お一人で何通も出されたものや、連名のもの、記載事項が不備なものなどは無効となりますのでご注意ください。

※当館からの返信は、再発行いたしません。

5月の行事案内

《入場無料(ギャラリートークを除く)・いずれも午後1時30分から行います》

月日	行事	内容	会場
5/6(日)	講演会	百工比照について (嶋崎 丞 当館館長)	ホール
5/12(土)	ギャラリートーク	重要文化財「百工比照」 (高嶋 清栄 学芸専門員)	展示室
5/13(日)	ビデオ鑑賞会	①作家シリーズ3 芸術はアクション ポロック/白髪一雄 (30分) ②作家シリーズ4 光への探求 レンブラント/モネ (30分)	ホール
5/19(土)	キッズ☆鑑賞講座	コレクション展示室の絵画を鑑賞しよう (前多 武志 主任主事)	講義室
5/20(日)	月例映画会	①民間陶器 浜田 庄司 (25分) ②フランドル映画 水が語るもの イタリアルネサンスとの出会い (23分)	ホール
5/26(土)	ギャラリートーク	甲冑と陣羽織 (南 俊英 学芸第一課長)	展示室
5/27(日)	月例映画会	利休の茶 (45分)	ホール



いろ え たからづくしもん ひら ばち

色絵宝尽文平鉢 古九谷

江戸 17世紀

口径46.6 底径17.5 高11.8(cm)



口径が四六・六cm、高さも十一・八cmという、古九谷の中でも特に大きな作品の一つです。

器形は、底から緩やかに丸く立ち上がった胴部に端反り気味に鐔状の口縁が続いています。

見込には団扇を大きく描き、鷺と沢瀉を描き入れています。また見込の周囲には、草花文と算木文を挟んだ七宝文の帯を巡らしています。周縁部は四つに区画し、各窓には竹図と拍板に巻貝と思しき文様を描いています。さらに口縁部には雲気文風の唐草文を黒で描き込み、緑の色絵で塗り潰しています。

文様構成は八宝文などのいわゆる宝尽文で、見込の鷺と沢瀉文や周縁部の各文様は、青花文様にみられるものが多く見えますが、自由な取り合わせによる和様化された作品です。

内側の彩色は、黄、紫、緑の三彩で大振りな感じの文様と相まって、力強く素朴ながらも華麗な印象の作品となっています。

裏面は、胴部に蕉葉文を対に描き、赤の彩色で蔓状の線を添え、腰と高台周りに二重線を巡らし、高台内には赤で銘「大明□□□□」と記されます。

扇子と異なり団扇をメインの文様に取り上げた作品は例が少なく、貴重な作例といえましょう。

ミュージアムショップ通信

美術館周辺の木々の緑も映え、吹く風も心地よい季節となりました。行き交う人々の表情も心なしか清々しく、足取りも軽やかです。

さて、休館前最後の当館主催特別展「生誕100年 高光一也の画業—モダンの煌めき」がいよいよ開催されます。郷土が生んだ日本洋画壇の巨匠、高光一也氏。氏の生誕100年を記念する大々的な本展は、すでに皆様から熱い期待を寄せていただいております。氏の描く女性像は、まるで新緑のように清新で、春の日差しのように麗らかです。今回の展覧会に向けて図録も新しく作りました。

美術館まで一足のぼして、久々に健康美あふれる高光芸術に囲まれて過ごしませんか。



高光一也の画業〈図録 2,000円〉

次回の当館展覧会

前田育徳会
尊經閣文庫
展示室

甲冑と陣羽織

第2展示室

石川県の
寺社文化財展

第5展示室

伝統加賀友禅
工芸展の精華

休館日：5月21日(月)～23日(水)

石川県立美術館だより 第283号
2007年5月1日発行

〒920-0963 金沢市出羽町2番1号
Tel:076(231)7580 Fax:076(224)9550
URL <http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/>